

子ども俳句 「ゆきだるま」

冬といえば「雪」。大人にとってはうんざりの雪も、子どもたちにとっては天からの最高の贈り物です。子どもたちは積もった雪で楽しく遊び回ります。

「おにぎりが どんどんふくらみ ゆきだるま」

はじめは手のひらで握れるおにぎりのような雪のかたまりから、どんどんと大きく膨らむ雪だるま。子どもたちがワクワクしながら雪だるまをつくる風景が浮かびます。

「ゆきだるま わたしのぼうし にあってる」

雪だるまには、バケツを帽子にしたり、炭やみかんで目鼻をつけたものです。子どもにとっては自分の分身のように愛着を感じるのでしょうか。



荒高掲示板

〜県立荒砥高等学校〜

「紅花染めから白鷹を学ぶ」
1年次の総合学科の目玉教科「産業社会と人間」では、自分自身を知るための取り組みや、さまざまな職業についての見聞を広げて現代社会について学んだりと、自分のキャリアアップのためにいろいろな角度から学んでいます。地元地域について学ぶ取り組みもその一つです。

1月24日、小松織物工房の小松寛幸さんを講師に迎えて、1年次生全員で白鷹町の伝統文化・工芸を体験学習しました。「白鷹紬」と「紅花染め」について、地元のことでありながら初めて聞くことが多く、改めて「白鷹紬」の貴重さを認識しました。また、途絶えていた紅花染を復活させ、「本物にこだわった紅花染」のために、栽培から染色そして織りまで自分たちで手がけていることなどを学びました。

その後、紅花染めの体験では、高価な100%天然の染料を使わせていただく体験に緊張しながらも、だんだん綺麗に発色していく様子に目を丸くしながら驚いていました。生徒たちは、体験を通して本物の価値を実感しながら、伝統文化を守っていくことの大切さと難しさを改めて感じようでした。

なお、一年間の「産業社会と人間」を通して学んだことを振り返る発表会を2月21日（金）に予定しております。



▲紅花染めのハンカチ作りを体験



▲自分の作品を披露しました

町報川柳 「白」

- 白鷹山夢は横綱大銀杏
久しぶり白足袋履きし祝いごと
干柿も白くなる前腐れ落ち
「女子駅伝」世界遺産富士山雪化粧
白い歯が抜けて白髪が生えてくる
白鷹山親方にんまり勝ちつぷり
五十路過ぎ寄り添う心は純白の頃
食べられる昔の雪は白かった
お白粉をぬって可愛い七五三
お祭りに白いエプロンつきまとう
万両の白実ついはむ親子どり
白無垢の花嫁姿で別れです
白髪のパバと呼ばれる年になり
白いほど本当だべとうたがわね
春越えて秋豊作と今白原
吐く息の白さに思わず背をまるめ
初雪や田畑白くし銀世界
白銀に踏んぱり活入れ月の冴え
白梅の盆栽眺め春を待つ
白い毛に衣替えの山うさぎ
白銀にシユプールを描くスキーヤー
にくしみも白紙に戻し年明けぬ
意のままにはならぬ浮き世が面白い
白い物降って来たよと茶飲友
ジャジャ娘嫁ぎ行く時白無垢に
葉を降ろす木々に優しく雪桜
新緑の中にまぶしきつのかくし
白無垢のこぶしの花が似合う町
雪降りて白一色の銀世界
物忘れ互いに笑う共白髪
平凡で白髪も殖える八十夫婦
真っ白な寒に埋もれて春を待つ
- 高岡 安部 健一
武蔵野 池田 武子
山口 石川與次衛門
荒砥甲 五十公野かをる
大瀬 五十公野春己
世田谷 糸 マサ
浅立 梅津美千子
滝野 海老名さち
世田谷 遠藤 八重
横須賀 大滝健次郎
菖蒲 奥山 節子
高玉 片山 時美
山口 児玉 保子
山形市 小林 英二
つくば市 斎藤 靖夫
畔藤 佐藤 孝子
箕和田 鈴木 トミ
荒砥甲 鈴木美貴子
鮎貝 関口 つや
十王 平 恒人
高玉 高橋 朝子
浅立 高橋 とみ
荒砥乙 高橋 白兔
荒砥乙 土谷 灯一
箕和田 土屋 敏子
箕和田 土屋 敏子
荒川区 戸村 平敏
荒砥乙 保科 努
ふじみ野 村上 桂造
十王 守谷 三郎
鮎貝 横沢 直太
山口 渡部喜美子

次回「風」二月二十五日まで。「スタート」三月二十五日まで。
白鷹町大字荒砥甲八三三番地 白鷹町役場総務課企画室情報係 宛